

[From Clinical Laboratory]は検査に関するお知らせやピックス等を掲載し不定期に発行する情報紙です

病理の仕事って？～組織診断編～

病理検査室では、組織診断、細胞診断、手術中の迅速診断、病理解剖を4名の検査技師と2名の病理医で行っています。病理検査とは患者様の身体から採取された病変の組織や細胞から顕微鏡標本を作り、病理医がそれを顕微鏡で観察し診断する検査です。

今回は組織診断に的を絞って、検査の流れを簡単に紹介したいと思います。

①検体提出

採取した組織は10%ホルマリンに浸した状態又は手術材料など大きな検体は生の状態で提出されます。

提出する際は検体には名前をはっきり記入してください。

受付されるとカルテの病理STATUSは、採取実施済から部門受付になります。



②切り出し

検体提出の翌日に行われます。標本作製のために、検体の適切な部位から検査に必要な組織片を切り取りカセットに入れます。この作業は生検など小さな検体は検査技師が行い、手術材料など大きな検体は病理医が行います。切り出された組織は、自動包埋装置という機械で一晩かけてパラフィンに浸透させます。

切り出しが終わると病理STATUSは受付済から切出済になります。

③包埋

パラフィンが浸透した組織を大きさに合った容器に入れて冷やし、ブロックを作成します。

④薄切

ミクロームという機器でブロックを3～5μm程の厚さに薄く切り、水に浮かべスライドガラスに貼り付けます。

⑤染色

全ての標本に一般染色と呼ばれるHE染色を行い病理医が一度観察した後、必要に応じてさらに細かく染め分ける特殊染色や免疫染色を行います。

染色が終わると病理STATUSは、切出済から染色済になります。

また特殊染色や免疫染色が追加された場合は追加染色中になります。

⑥診断

顕微鏡で観察し、病変が腫瘍であるかどうか、腫瘍であれば悪性か良性か、腫瘍の種類や広がりなどを調べ最終診断を報告します。病理STATUSは完了になります。

通常、検体提出から2日目の夕方以降、順次結果報告が行われます。検体が大きく再固定が必要な場合、脂肪が多く脱脂という操作が必要な場合、追加染色がある場合などは通常より1～3日結果報告が遅れます。

また土日は作業が中断しますので、金曜日提出の検体は月曜日からは作業工程に入ります。

ご理解のほど、よろしくお願いします。

病理(内線8255)

